



Title	英語科カリキュラムの再検討 英語の使える英語科教員の養成をめざして
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 35, pp.53-61; 1986
Issue Date	1986-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/32951">http://hdl.handle.net/10069/32951</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-25T06:15:03Z

# 英語科カリキュラムの再検討

—— 英語の使える英語科教員の養成をめざして ——

大 坪 喜 子

## 0. はじめに

英語の使える英語科教員を養成するのは、英語科教員を養成する大学ではあまりにも当然のことであるはずである。しかしながら、一般的に言えば、日本の教員養成大学のカリキュラムをそのまま運用した場合に必ずしも英語運用力のある英語科教員を養成することにはならないのが現実である。理由はいろいろ指摘されうるけれども、本質的なものとしては、やはり、時代の要請の変化に大学の英語教育が対応できていないことをあげなければならない。昭和20年代の中頃に発足した新制大学の教員養成課程の英語科教員養成のためのカリキュラムに、英語の使える英語科教員の養成を期待することは無理であるかもしれない。しかし、その後の30年余りの年月が経過する過程において、日本の国際社会における役割の重要性が増すにつれて、日本の英語教育に対する不満も強くなり、その改善が強く求められてきている。その社会的要請に対して、大学の英語教育がこれまであまりにも無関心であったことは反省しなければならないであろう。特に、急速に国際化社会へ移行している現代社会においては、日本の英語科教育をになう中学校および高等学校の英語科教員を養成する教員養成大学の責任は重い。

このような反省に基づいて、過去10年間に、長崎大学教育学部英語科においては、「英語の使える英語科教員の養成」ということに焦点を当てて、従来の英語科カリキュラムを見直し、不足しているところを補足するという方向で、少しずつ改めてきた。それは、英語が単なる学科目であるのではなく、国際語の一つとして広く世界のいたるところで、もっともしばしば用いられている言語であるという認識に基づいてなされていることをつけ加えておきたい。

以下、本稿では、従来の英語科カリキュラムの不足しているところを補うことによって、日本の教員養成大学においても英語の使える英語科教員の養成は実現できることを示したいと思う。そのために、英語科カリキュラムについて、まず第一に、従来のカリキュラムではどういうところが不十分であったのか、そして、その不十分であったところを補うために、どういうコースを加えたのかを述べる。第二に、その加えられたコースについて、その内容と学生たちの反応に言及しながら、その意義と成果について述べる。そして、最後に、これから、「国際語としての英語」を教える未来の英語科教員のための必要性の分析 (Needs Analysis) を示し、今後のカリキュラムのありかたの方向を示したいと思う。

## I 従来の英語科カリキュラムの問題点

従来の英語科カリキュラムの例として、ここでは昭和48年度(表1)のものを用いるこ

とにする。それは、私が長崎大学教育学部へ赴任した当時のカリキュラムであり、「英語の使える英語科教員の養成」ということがそれほど意図されていなかった頃のものであるという意味で、「従来のカリキュラム」と呼ぶことにする。長崎大学教育学部（学芸学部を含む）が発足してから、すでに20年余の年月が経過していた頃のカリキュラムであることになる。

「英語の使える英語科教員の養成」という観点からみた場合、このカリキュラムの特徴として、まず、あまりにも知識中心にかたより、英語運用訓練が軽視されていることを指摘しなければならないけれども、ここでは、注目されてよい点について述べることにしたい。それは、「英語音声学」が一年生から四年生まで連続して開講されていることである。外からみれば、「英語音声学」が四年生まで、8学期にわたって開講されているのは異様に思われるかもしれないけれども、その具体的な内容は、I, II（一年生）が、いわゆる「英語音声学」であり、残りのIII, IV（二年生）、V, VI（三年生）、VII, VIII（四年生）は、L.L.（Language Laboratory）を利用して行うヒアリングの練習のために開講されていたものである。これは、学生の英語運用訓練の第一歩として、ヒアリングを強調していたものとして評価されてよい。「英語の使える英語科教員の養成」の方向づけが、このカリキュラムにすでに表われていたことになるというよいであろう。事実、その当時は、一般にL.L.を利用してヒアリングの訓練をすれば、かなり英語運用面の成果があげられるものと期待されていた。

しかしながら、現実的には、L.L.を利用して行う英語運用訓練には限界があることを認めさせられることになる。学生たちは、ヘッド・フォンを使ってきれいに録音された英語を聞くことにあまりにも慣れてしまい、ふつうの教室で、テープ・レコーダーを利用して英語を聞きとることができなくなったり、英語の自国語話者のなまの英語が聞きとれないなどの問題が生じてきた。われわれは、L.L.を使用すればすべてがうまくいくかのような錯覚を抱いていたことを認めなければならなかったのである。私も、当時、熱心な学生の要望に応じて、時間外にL.L.を利用してヒアリングの練習の機会をつくり、聞きとった内容について、インターフォンを使って、個々の学生に質問したりした。結果はどうであったのかと言えば、その熱心な学生の一人が「英語が話せるようになって卒業したかった」とつぶやいて卒業していったことからわかるように、やはり、成功していない。

L.L.を用いたヒアリング訓練のほかに、英語運用訓練コースとして英語の自国語話者による「英会話」（二年生）と「英作文」（二年生）が開講されていた。しかしながら、私と

（中学校教科および教法）（昭和48年度） 英語専攻課程

学科学科	教科目(省令)(免許法)	授業科目	単位数	授業時間数		主対象・課程年次						
				前	後	小・中・高		専				
						全	選	全	専			
英語	英	英語音声科	I	1	エ2			(2)		(1)		
			II	1		エ2		2		(1)		
			III	1	エ2					2		
			IV	1		エ2				2		
			V	1	エ2					3		
			VI	1		エ2				3		
			VII	1	エ2					4		
			VIII	1		エ2				4		
		英語	語	英文法概論	I	2	コ2				2	
					II	2		コ2			2	
				英語学講義	I	2	コ2			(3)		(3)
					II	2		コ2				4
英語史概説	I	2		コ2				3				
	II	2		コ2				4				
英語	学	和文英訳	I	1	エ2			(2)		2		
			II	1		エ2				3		
			III	1	エ2					3		
			IV	1		エ2				3		
		語学演習	V	1	エ2					4		
			VI	1		エ2				(4)		
			VII	1	エ2					4		
			VIII	1		エ2				4		
英語	米	英会話	I	1	エ2			(2)		②		
			II	1		エ2		(2)		②		
		英作文	I	1	エ2			(2)		②		
			II	1		エ2		(2)		②		
		英文	学	英文学史	I	2	コ2				2	
					II	2		コ2			2	
					III	2	コ2				3	
				米文学史	I	2	コ2				3	
					II	2		コ2			3	
				米文学講師	I	2	コ2				4	
					II	2		コ2			④	
				現代	詩	現代	I	1	エ2			(2)
II	1							エ2		(2)		2
詩	III					1	エ2			(3)		(3)
	IV	1				エ2				3		
	V	1	エ2							4		
現代	詩	VI	1	エ2				4				
		VII	1		エ2			(4)				
		VIII	1	エ2				(4)				
沙翁	詩	IX	1		エ2			(4)				
		X	1	エ2				(4)				
英語科教育	教科教育法	英語科教法	I	2	コ2			3				
			II	1		コ1			③			

(表1)

同時期に長崎大学へ赴任して、これらの授業を担当したアメリカ人教師は、日本では英語は死語 (a dead language) であると失望してしまい、長崎大学を一年間で去っていったことから、当時の英語科の英語運用訓練が体系的に行われていなかったことがうかがえるであろう。

昭和49年度の英語科カリキュラムからは、「英語音声学VII, VIII」(四年生)は削除されることになった。L.L.での訓練を4年間もつづけることを学生たちが必要としていないことが、その受講者がほとんどいなくなっていたことで知らされていたからである。これは、今から考えれば、当然のことであるといってよい。英語科の学生が必要とする、より体系的、生きた英語運用訓練を準備することが求められていたことになるであろう。それは、一方通行の訓練ではなく、二方通行の、人と人の間で行われる英語運用訓練を意味する。実際のコミュニケーションは、話し手と聞き手の両方からのやりとりであり、隔離されたL.L.の中で行われる一方通行の訓練では不十分であるからである。

とはいうものの、当時の私自身には、その訓練法がどのようなものでなければならないのかはよくわからなかった。私自身、そのような訓練を受けた経験もなく、また、適当なモデルも見当らなかつたからである。長崎大学の英語科学生たちが、日本人教師の授業とアメリカ人教師の授業の間をつなぐ英語運用訓練を必要としていることに気がつき、その訓練法を試行錯誤的にさがしはじめたのは、ハワイのイースト・ウエスト・センターでの英語教員養成担当者のためのプログラム、“ESOL<sup>1)</sup> Teacher Trainers Program” (1975. 9. 1～1976. 3. 31)に参加してからのことである。

## II 新しい英語科カリキュラムの目標

英語科カリキュラムは、当然ながら、われわれがどのような英語科教員を養成しようとしているのかを示すものである。私は、中学校・高等学校の英語科教員養成担当者として、英語運用力のある英語科教員の養成を目標とし、従来のカリキュラムの不足しているところを補うという方法をとることにした。従来の英語科カリキュラムは、明らかに、知識中心であり、英・米文学、英語学関係が中心となっており、英語を使う訓練は、主として、「英会話」(二年生)と「英作文」(2年生)に限られていた。そして、「英会話」と「英作文」は、長崎大学英語科の場合、アメリカ人教師が担当し、その他のコースは、テキストは英語で書かれたものであるけれども、日本人教師により日本語で実施されるのがふつうであった。このため、補足されなければならないのは、いわゆる、四技能——聞く・話す・読む・書く——の運用力を身につける訓練であるのは明らかである。従来のカリキュラムの枠組の中で、英語科学生の英語運用力を身につけさせるために、どのようなコースを補えばよいのかを考えなければならないことになる。

イースト・ウエスト・センターでの7か月間の研修後、そのプログラムの中での自分自身の訓練のされかた、また、ハワイ大学で行われている外国人留学生のための英語運用訓練コースなどを参考にしながら、長崎大学英語科学生に適する訓練法を、学生の反応をみながら、工夫してきた。従来のカリキュラムで育てられた私の長崎大学での最初の卒業生たちは、英語を使うこと、特に、英語を話すことができないまま卒業していることから、英語科学生のための英会話を含む英語運用訓練法をつくり出すのが私の目の前の課題であつ

たのは当然のことである。

それまで、日本の多くの大学では、英語を話す訓練、いわゆる、英会話の訓練は大学外でやっておくべきことであるとして、放っておかれていたところである。しかし、海外研修で、国際語としての英語の実際を経験し、また、英語国の大学で外国人留学生の英語の運用訓練がきめ細やかに行われている事実に接すれば、日本の大学の英語科学生の英語の運用訓練を大学外の仕事として他へまかせることはできなくなる。むしろ、日本のように日常生活において人々が英語を使わない環境の場合は、積極的に英語を話す訓練を大学の中で行うべきであると思うようになった。それは中学校・高等学校の英語科教員の養成においては、大事な仕事であることを改めて認識させられ、私自身のおかれている立場の責任の重さを知らされた。

ここでいう「英語の使える英語科教員」または「英語運用力のある英語科教員」とは、日本で従来から行われているような英文法を中心として訳読をすることも当然できるけれども、それだけではなく、英語そのものを、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることのできる英語科教員を意味し、そういう英語科教員を養成することをわれわれは第一の目標とするのである。

### III カリキュラムの補足 — その1 英作文と速読

それでは、従来の知識中心のカリキュラムに、英語運用力を訓練するためにどのような補足がなされたのかと言えば、まず、昭和51年度のカリキュラム(表2)が示すように、「英作文」の訓練が従来のI, II(二年生)だけであったものが、III, IV(三年生), V, VI(四年生)まで補充されたことを述べなければならない。これは、担当者のアメリカ人教師、ロナルド・ゴゼウイシュ氏(Mr. Ronald Gosewisch)の熱意による自発的な申し出により実現したもので、英作文訓練の強化を意味する。なお、氏は教養部の英語(一年生)の授業も担当しており、英語科学生は一年生から四年生まで氏の体系的英作文指導下にあることになる。

(昭和51年度)

氏は、米文学講義I, II(四年生前・後期)(表1を参照)も担当し、この授業において、一学期間に数冊のアメリカ文学作品を原書で読むことを義務づけ、日本人教師による訳読中心の授業と平行して、いわゆる、速読の訓練を意図した。その後、昭和55年度のカリキュラム(表3)が示すように、この原書の速読

英 英 及 会 作 び 話 文	英 会 話	I 1	エ 2		(2)	2		
		II 1		エ 2	(2)	2		
	英 作 文	I 1		エ 2		(2)	2	
		II 1		エ 2		(2)	2	
		III 1		エ 2			③	
		IV 1		エ 2			③	
		V 1		エ 2			(4)	
		VI 1		エ 2			(4)	

(表2)

の訓練は、三年生後期と四年生前期に早められ、英作文の場合と同じように、教養部の英語(一年生)での氏の授業と連けいして、一年生から四年生まで、語いの限られたやさしいものから原書へと体系的に速読の訓練が行われている。

### IV カリキュラムの補足 — その2 英会話を中心とした「英語演習」

英語の自国語話者による英作文の訓練と速読の訓練の体制が整い、私は英語科学生たち

英語の自国語話者による英作文の訓練と速読の訓練の体制が整い、私は英語科学生たちが四年間をとおして、英語の使用にもかなり慣れて、ある程度の自信をもって卒業するであろうと秘かに期待していた。しかしながら、この期待はあまかったことをまもなく知らされることになった。四年生にもなれば、少なくとも、英語科専攻生たちは彼らのアメリカ人教師と英語によるコミュニケーションを楽しむことができるようになることを期待していたのであるが、現実には、学生たちはアメリカ人教師と英語で話すことを避けるようになっていたことを知らされたのである。学生たちの事情を聞いてみると、アメリカ人教師による英会話およびその他の授業において、彼らは自発的に話すことはほとんどなく、黙って聞いているだけであるという。なぜそのようになるのかという彼らの理由は、英語では簡単な返事さえもすぐにはできないうえに、発言したとしても間違いばかりで、結局は、黙って聞いているだけになってしまうというのである。この場合、学生たちの消極的な学習態度を指摘して、彼らの責任にしてしまうことも可能であるであろう。しかしながら、私は、むしろ、日本の中学校・高等学校での英語科教育が、昭和30年代の頃と本質的には変っていないことに問題があると思う。そして、これを、英語科教員養成にたずさわるわれわれの責任として受けとめなければならないと思う。なぜ、そう思うのかというと、われわれの学生たちが、今、困っていることは、私自身が昭和30年代に大学で受けた英語教育でとまどい、困っていたこととまったく同じ現象であるからである。それは、中学校・高等学校で、英文法中心の訳読のみを経験し、英語運用訓練をまったく受けたことがない私が、大学ではいきなり英語の自国語話者の英会話の授業へ入れられてしまい、ひどく困っていたあの経験と同じ経験を学生たちにさせているのである。

当時の困った原因、また、今、われわれの学生たちが困っている原因を、現在の私の立場から述べるなら、日本の英語科教育で育てられた日本人学生の現実と、その経験を共有しない英語の自国語話者の日本人学生に対する前提との間にかなりのずれがあること、そして、そのずれがずっと放置されたままになっているということである。そこには、考慮されなければならない二つの問題があると思う。一つは、前述のとおり、現在でも英語科へ入学してきた学生は、そのほとんどが中学校・高等学校で英語運用訓練をまったく受けていないため、いきなり、英語の自国語話者の授業を受けさせるのは無理であり、日本人教師により予備訓練が与えられる必要があるということ、そして、そのほうが効率がよいのではないかということである。もう一つは、文化の相違の問題である。特に、会話の練習においては、双方が相手の文化をある程度は理解しておくことが大事な要素となる。たとえば、日本人学生は、間違いを恥と思い、間違いを恐れて発言しないことを英語の自国語話者が理解しておくこと、また、日本人学生も、アメリカ人は黙っていることをきらうため、彼らが会話の授業で発言しなければ、アメリカ人教師は一人で話しつづけることになることなどを理解しておくことなどにより、双方の間にあるずれが少なくなることが予想されるであろう。そして、双方が、お互いの文化の相違を理解したうえで、一つの仕事、すなわち、英会話を練習すること、または、英会話の訓練をすることに従事すれば、正面から向いあって、より能率的に実行できることになるであろう。

「英語演習」は、このような問題を解決するために、従来の英語科カリキュラムの一部を変更して開講したものである。カリキュラムの上では、昭和55年度(表3)から記載されているけれども、実際には、ハワイ研修直後の昭和51年度から、試行錯誤をくり返した

がら、長崎大学英語科学生に適する運用訓練法をつくり出す試みを行っていた。まず、昭和51年度には、「英語学演習Ⅱ」(二年生選修生)の授業で、L.L.を利用しないで、ふつうの教室でテープ・レコーダーを使って、ヒアリングの訓練をし、教材はハワイ大学で外国人留学生のヒアリング訓練用に用いている教材を使ってみた。これは外国人留学生のための講義ノートのとり方の練習用として作られたもので、時々、私自身が読んで聞きとらせることにしていた。このふつう教室でのヒアリングの訓練は、英語科選修生にも効果がみられたようで、その中の一人が3年次にTOEFLを受け、520点を獲得している。

昭和52年度から昭和54年度まで、「英語学演習Ⅰ」(二年生専攻生)と「英語学演習Ⅱ」(二年生選修生)を担当し、昭和51年度の場合と同じ方法でヒアリングの訓練をつづけた。そして、昭和53年度からは、「英語音声学Ⅴ,Ⅵ」(三年生)を担当し、次の段階へ進めることにした。〔Ⅴ〕では、やさしいアメリカの民話などを録音テープで聞いて、その聞きとった内容について、英語で自分の意見を述べる練習をとり入れた。また、〔Ⅵ〕では、各自、自分の好きな英語の自国語話者の録音テープを選び、その一部分を選んで何度も聞き、できるだけモデルの読みかたをまねて読み、そのモデルと自分の読んだものを録音し、それを授業では全員が聞いて、英語で批評をするという方法をとった。この訓練で、学生たちは日本人特有のイントネーションがなくなり、英語らしいリズムとイントネーションで読めるようになるのがはっきりとわかり、効果的な訓練法であるように思われた。この授業では、中学生・高校生用のヒアリングの教材を、自分で読んだものを録音して作ることを義務とした。この頃は、まだ、他の人の書いたものを読むだけであったが、物語の中の人物にあわせて、声を変えて読んだりするという、思いがけない能力を発揮する学生がいたりして、英語科学生の英語運用訓練の意義を改めて知らされたりした。

日本人学生にとって効果的な英会話訓練法と思われる方法に出会えたのは、昭和54年7・8月に英国のランカスター大学の“*Inservice courses*”<sup>2)</sup>に参加したときである。イースト・ウエスト・センターのラリー、E. スミス氏 (Mr. Larry E. Smith) の紹介により、英語の自国語話者の英語教師のためのコースに参加できたのであるが、“*Communicative language teaching*”をテーマに、社会言語学的知識と言語心理学的知識とを応用した実践的なコースであった。特に参考になったのは、それらの知識に基づいて実践されているランカスター大学の外国人留学生のための英語訓練法であった。ちょうど、長崎大学英語科の学生たちと同じ年ごろのイラン人学生たちを20名ほどあずかって、工学系の単科大学へ進学させるための英語運用訓練をしているところを見学することができた。イラン人学生たちとその指導にあたっているイギリス人の先生たちに、直接、質問することもでき、長崎大学の学生の英会話訓練法にいろいろなヒントを得ることができた。もちろん、イラン人学生の素直な、開放的な性格と日本人学生の恥かしがりやの性格とは対称的であるので、ランカスター大学のスタッフが指導しているとおりににはできないけれども、日本人として、日本人学生に英会話を効率的に指導できるヒントはいろいろ見つけることができた。帰国後、9月からさっそく、2年生の授業にその中のいくつかをとり入れてみた。その時に作製した長崎大学で使用できる訓練コース用の教材の例については、研究報告<sup>3)</sup>(1980)に示している。

その後、昭和55年9月から昭和57年6月までのハワイ大学言語学科での研修から帰ってからは、これまでの試行錯誤の経験をもとに、そして、私自身の英語国での生活経験を生

かして、「英語演習Ⅰ，Ⅱ」（2年生）では、最初から英会話を中心とした訓練をとり入れ、教材は、日・米文化の相違などを扱ったものを選び、エッセイを書く訓練もとり入れて、英語の全体的運用訓練を行っている。私自身にも、ようやく、英語科学生 of 英語運用の全体的な訓練法が見えてきており、最近の3年間の経験では、2年次に1年間の訓練を行えば、ほとんどすべての学生にとって最初の目標が達成できることがわかってきた<sup>4)</sup>。

昭和60年度のカリキュラム（表4）では、長崎大学教育学部全体の教科教育の教科目を充実させることになり、「英語演習Ⅲ，Ⅳ」（3年生）は「英語教育演習Ⅰ，Ⅱ」に変更している。すでに述べたように、「英語演習Ⅰ，Ⅱ」（2年生）で、ほぼ初期の目標が達成できるようになり、「英語演習Ⅲ，Ⅳ」（3年生）では、すでに中学生・高校生用のヒアリング教材を学生たちが自ら、モデルとなって作る仕事を課していたので、「英語教育演習Ⅰ，Ⅱ」に変更されるのが当然のことにさえ思われる。言い換えれば、長崎大学英語科では英語運用力のある英語教員の養成ということだけではなく、さらに、中学生・高校生のための英語運用訓練のできる英語科教員の養成へと向かっていることになる。

### V 新しい英語科カリキュラム

最初のハワイ研修から10年間経過した今、ようやく、長崎大学英語科で養成する未来の中学校・高等学校の英語科教員は、英・米文学についての知識、および、英語学についての知識に加えて、英語の運用力にも一応の自信をもてるまでの運用訓練を受けることができるようになり、さらに、中学生・高校生に英語を生きたことばとして使えるように指導できるところまでに至っている。われわれは、彼らが、生徒の必要性に応じた訓練、および、その訓練に必要な教材も、自らの手で、自由に創り出すことのできる英語科教員になることを期待している。

英語科教員養成担当者の立場から、私は、彼らが、英語の自国語話者による英作文および速読の四年間にわたる体系的訓練と日本人教師による英会話を中心とした英語運用訓練をとおして身につけた英語運用力を統合させるために、「英語科教育法Ⅰ，Ⅱ」（3年生）では、英語で自分の意見をまとめる訓練を課すことにしている。従来のカリキュラムではいきなり、卒業論文を英語で書くことが要求されていたわけであるが、補足修正された新しい英語科カリキュラムにおいては、学生た

(中学校教科および教法)(昭和55年度) 英語専攻課程

学科目 (省令)	教科目 (免許法)	授業科目 位	単 位 数	履修時間数		主対象課程		学年	
				前	後	① 全	② 全	③ 全	④ 全
英 語 学	英 語	英語音声学	I 1	エ2	2	1			
			II 1	エ2	2	1			
		英文法演習	I 1	エ2	2	2			
			II 1	エ2	2	2			
		英語演習	I 1	エ2	2	2			
			II 1	エ2	2	2			
	学 語	初文英訳演習	I 1	エ2	2	2			
			II 1	エ2	2	3			
		英語学演習	I 1	エ2	3	3			
			II 1	エ2	3	3			
		英語学講義	I 2	コ2	3	3			
			II 2	コ2	4	4			
		英語史	I 2	コ2	3	3			
			II 2	コ2	3	3			
中世英語演習	I 1	エ2	4	4					
	II 1	エ2	4	4					
英 米 文 学	英 文	英文学史	I 2	エ2	2	2			
			II 2	コ2	2	2			
		米文学史	I 2	コ2	3	3			
			II 2	コ2	3	3			
	学 文	英文学講義	I 2	コ2	3	3			
			II 2	コ2	4	4			
		米文学講義	I 2	コ2	3	3			
			II 2	コ2	4	4			
		現代米文学演習	I 1	コ2	2	2			
			II 1	エ2	2	2			
英米詞解訳演習	I 1	エ2	3	3					
	II 1	エ2	3	3					
近世米文学演習	I 1	エ2	4	4					
	II 1	エ2	4	4					
英 美 会 話 及 び 文	英 会 話	I 1	エ2	(2)	2				
			II 1	エ2	(2)	2			
	英 作 文 及 び 文	I 1	エ2	(2)	(2)				
			II 1	エ2	(2)	(2)			
		III 1	エ2	(3)	3				
			IV 1	エ2	(3)	3			
V 1	エ2	(4)	4						
	VI 1	エ2	(4)	4					
英語科 教育 法	英語科教育法	I 2	コ2	3	3				
		II 1	エ2	3	3				

(表3)



ちは、かなり英語を使うことに慣れてから、卒業論文を書くことができるようになってきている。これは、言うまでもなく、学生たちにとっても、訓練をする教師にとっても、長い、しかも、地味な努力が毎日毎日つづけられてはじめて実現できることである。そのような英語教育が長崎大学教育学部英語科において実現していることになる。

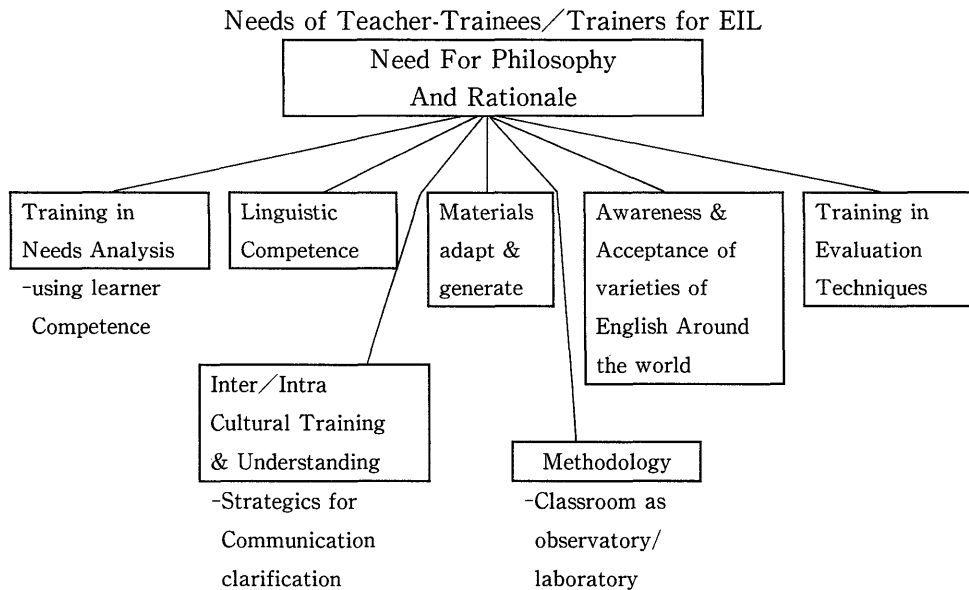
(昭和60年度)

学科目 (省令)	教科目 (免許法)	授業科目	単 位 数	隔年表示		授業時間数		主対象課程・年次				
				前	後	全	選	小・養小		中・養中		養 幼 全
								全	専	全	全	
英語科 教育	※ 英語教育	英語教育演習	I 1		エ2			3		3		
			II 1					3		3		
	教科 教育法	I 2		コ2				3		【3】		
			II 1		エ2							【3】

(表4)

## VI これからの英語科カリキュラム

これまで、従来の英語科カリキュラムの枠組み中で、英語運用訓練を中心に、英語科カリキュラムの補足修正を行ってきた。一応、これでほぼ整備できたことになるというよいであろう。しかし、英語が国際語の一つであるという視点に立つとき、英語科教員養成のためのカリキュラムには、さらに、他の要素が加えられなければならない。場合によっては、従来のカリキュラムの大幅な改訂が必要になることも予測される。ここでは、一つの方向として、昭和59年夏、ハワイのイースト・ウエスト・センターでのプログラム<sup>5)</sup>に参加し、各国から集まった英語の自国語話者の英語教師、外国語としての英語を教えているわれわれのような立場の英語教師の間で、「国際語としての英語」をテーマに議論を交わしてまとめた“Needs of Teacher-Trainees/Trainers for EIL”<sup>6)</sup>を示しておきたい。



これは、英語科カリキュラムが、視野を広げて、さらに整備されなければならないことを示唆していることになるように思われる。今後の課題を示していることになるであろう。

## 注

- 1) ESOLとは“English for Speakers of Other Languages”の略称で、このプログラムにはアジアの各国から英語教員養成担当者が11名(台湾1名、韓国2名、フィリピン1名、タイ4名、インドネシア1名、ボナベ1名、日本1名)参加していた。このプログラムは、日本の場合、文部省の公募により、旅費が支給され、ハワイでの一斉の費用はイースト・ウエスト・センターから支給された。この時、このプログラムは五年目を迎えていたのであるが、プログラム主任のラリー、E. スミス氏の英語教育に対する熱意のあらわれで、それまでの四回のプログラムの修正できるところはすべて修正し、7か月の研修期間に、アメリカで得られるありとあらゆる英語教育に関する情報が提供された。私にとっては、はじめての本格的な英語教育の訓練の場であった。
- 2) 英語の自国語話者の英語教師を対象としたイギリスでの本格的な英語教育のインサービス・コース(Inservice Courses)で、ランカスター大学の英語教育主任教授、クリストファー、キャンドリン氏(Prof. Christopher Candlin)を中心に、2か月間行われた。A、Bの二つのコースがそれぞれ四週間ずつ実施され、Aコースは理論を中心とし、Bコースは実践を中心として、かなり忙しい研修であった。出席者も、アメリカ、カナダ、メキシコ、アルゼンチン、オーストラリア、西ドイツ、イスラエル、タイ、韓国、フィリピン、日本というように多くの国から集まり、それぞれのコースに20名位参加していた。Aコースには日本人は1名、Bコースには2名参加した。
- 3) 長崎大学教育学部人文科学研究報告、29号(1980)。
- 4) 「英語演習」の実際については、「英会話を中心とした英語運用訓練法」、長崎大学教育学部教科教育研究報告(1986)を参照のこと。
- 5) ラリー、E. スミス氏担当のプログラムで、「国際語としての英語」について、六週間(1984年7月3日～1984年8月10日)、英語教育にたずさわる英語の自国語話者と非自国語話者がそれぞれの立場から考え、議論を交わした。出席者は、オーストラリア(2名)、ニュージーランド(1名)、パプアニューギニア(1名)、トラック(2名)、パラオ(3名)、イギリス(1名)、日本(3名)であった。
- 6) EILとは、*English as an International Language*の略称。

## 参考書目

- Brumfit, C. J. and K. Johnson (eds.) ; *The Communicative Approach to Language Teaching*.(1979) (Oxford University Press).
- Barnes, Douglas ; *Practical Curriculum Study*. (1982) (Routledge & Kegan Paul).
- Smith, Larry E. (ed.) ; *Readings In English As An International Language*. (1983) (Pergamon Press).